

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 22 日現在

機関番号：32686

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13327

研究課題名（和文）『北京の宣教師によるメモワール』の総合的研究

研究課題名（英文）Historical study on the Memoires concernant Chinois par les Missionnaires de Pekin (1776-1814)

研究代表者

新居 洋子 (Nii, Yoko)

立教大学・文学部・特別研究員（日本学術振興会）

研究者番号：10757280

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：『北京の宣教師によるメモワール』全17巻は、17～18世紀ヨーロッパにおける人類と文明の起源をめぐる関心の高まりに呼応して出版された。その内容はほぼ同時期にロシア語やドイツ語に翻訳され、あるいはオランダ商館長を務めたティツィングの日本研究にも利用されており、また日本の植民地統治下の満洲でも満鉄奉天図書館に大きな期待をもって収蔵された。つまり『メモワール』はカトリック圏外でも中国をめぐる知の大きな源泉となったのである。

『メモワール』の発信した知は、さらに19世紀フランスに成立するシノロジーの基礎となっただけでなく、同時期フランス社会での道徳教育に取り入れられるなど、シノロジーの外でも継承された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『メモワール』の全体像および流通の研究を通して、そこに盛り込まれた中国をめぐる知が、ヨーロッパでの文明や社会をめぐる問題関心に深く関与しながら在華イエズス会士によって形成、発信されるだけでなく、空間的、言語的、時間的な枠組みを越えて広範に伝達され、また再翻訳、再発信されたことが分かった。この成果は、歴史や思想をめぐる従来の研究がおもに国や地域といった空間的単位、あるいは言語的単位、さらに近世や近代といった時間的単位によって縦割りされてきた、その有効性を否定するわけではないものの、知の形成や流通の実態がもつ、従来の分析単位で捉え尽くすことのできない側面を明らかにしたと考えている。

研究成果の概要（英文）：Memoires concernant l'histoire, les sciences, les arts, les moeurs, les usages, &c. des Chinois (MCC), which consists of 17 volumes, was published in response to the growing interest in the origin of humanity and civilization during the 17th and 18th centuries in Europe. Some of the work was translated into Russian and German around the same time. MCC was used by Isaac Titsingh, who served as the head of the Dutch Factory in Japan, for Japan studies. It was also added to the South Manchuria Railway Library in Fengtian under the Japanese colonial rule in Manchuria as part of a long-awaited collection. This indicates that MCC became a major source of knowledge about China even outside the Roman Catholic world.

It was revealed that the knowledge transmitted by MCC, in addition to becoming the foundation of Sinology established in France in the 19th century, was also used outside of Sinology by being incorporated into, for example, moral education in France around the same time.

研究分野：人文学

キーワード：中国をめぐる知 知の伝播・翻訳・再発信 カトリック圏内外 シノロジーとその外

1. 研究開始当初の背景

『北京の宣教師によるメモワール(*Mémoires concernant l'histoire, les sciences, les arts, les moeurs, les usages, &c. des Chinois*)』(以下『メモワール』)全17巻は、18世紀後半に中国で活動したイエズス会宣教師(以下、在華イエズス会士)による報告集である。在華イエズス会士の報告集としては、通称『イエズス会士書簡集』(1702-1776)のなかの『中国書簡集』が有名だが、『メモワール』はその後継誌と位置づけられるだけでなく、性質を大きく異にする。『中国書簡集』は基本的に宣教報告を集めたもので、編纂もフランス在住のイエズス会士によって行われたが、『メモワール』は宣教に関する内容をほとんど含まず、編纂もフランス政府およびアカデミーの人々によって担われた。

『メモワール』は、18世紀半ばに2名の中国人イエズス会士が宣教師や国務卿ベルタン(Henri Léonard Bertin)の手配により、フランス留学を果たしたのがきっかけで誕生した。この中国人イエズス会士たちは、帰国の際にテュルゴー(Anne Robert Jacques Turgot)やベルタンらフランス政府高官から要請を受け、帰国後に現地の政治や文化、学問に関する報告をフランスへ送ることになった。そして彼ら、および彼らと北京西安門内蚕池口のカトリック教会(北堂)に同居したフランス出身のイエズス会士たちからベルタンらへ定期的に送られた報告がフランスで編纂され、『メモワール』として刊行されたのである。

こうした『メモワール』の存在そのものは、これまで東西文化交渉史や、明清時代中国カトリック宣教師史の分野において、一定程度知られてきた。まず、その書誌情報、および刊行のきっかけとなった2名の中国人イエズス会士とベルタンの交流については、ドエルニュ(Joseph Dehergne)による複数の論文において整理された。またこの報告集にたびたび現れる挿画については、李招瑩が美術史の観点から分析を行っている。ただしドエルニュや李招瑩は、『メモワール』所収の報告の内容にはほとんど立ち入っていない。個々の報告については、堀池信夫、井川義次、潘鳳娟らが分析を行っているが、この報告集が総体としていかなる背景、意図のもと編纂され、いかなる思想的意義を持つのかという問題を、未公刊史料などの分析を通して解明する研究は、これまでなかった。

そこで私は『メモワール』に最も多くの報告が収められ、18世紀後半の清朝宮廷に仕えた在華イエズス会士アミオ(Jean Joseph Marie Amiot)の報告について、その典拠となった漢文および満文の文献を調査、およびアミオ報告との比較分析を行い、あわせて17~18世紀当時のヨーロッパ知識人による中国に関する著述も調査した。その結果、アミオが宋明理学や中国古今の歴史叙述、および清朝の統治体制を、当時ヨーロッパで新たな普遍として立ち現れつつあった科学や世界史、および公共善をめぐる議論へと接続しようとしたことが分かった。とくに中国古代史に関しては、人類の歴史の起源に対する関心の高まりと連動して、ヨーロッパ知識人たちとのあいだに活発な論争が繰り広げられ、新しい世界史叙述へと結びついたことも明らかとなり、当時在華イエズス会士のもたらした中国をめぐる知が、18世紀以降のヨーロッパにおける知識世界の展開に少なからず関わっている可能性を考える大きなきっかけとなった。

2. 研究の目的

以上のような研究状況を背景として、本研究では、中国をめぐる知がヨーロッパ社会へ還元されていく経路としてのシノロジー(Sinology)に注目することにした。つまり、17世紀ヨーロッパにシノロジーの萌芽が現れ、19世紀に制度化された学知として成立し、学術的对象としての中国が立ち現れるまでの過程において、18世紀の在華イエズス会士による膨大な著述がいかなる作用を及ぼしたのか。そしてこのような、ヨーロッパにおける在華イエズス会士の著述の作用は、同時代東アジアを中心としつつ、その領域を超えて拡大した中国思想の国際化において、どのように位置づけられるのか。

以上の問題について解明するため、本研究では『メモワール』を主要な研究対象とし、以下の3点について明らかにすることを目的とする。つまり(1)18世紀当時のヨーロッパにおける『メモワール』の受容と作用、(2)19世紀ヨーロッパにおけるシノロジーの成立と展開への作用、(3)同時代の日本漢学や朝鮮儒学との対称性あるいは非対称性である。

3. 研究の方法

本研究は多言語史料の調査と分析を中心とし、ヨーロッパ側と中国側、公刊と未公刊の各史料を、海外と国内各機関で調査する。これらの史料の分析を通して、『メモワール』の内容的独自

性や、在華イエズス会士の執筆意図だけでなく、『メモワール』の編纂者側の意図とその背景、さらに読者側の状況と反応にいたるまで総合的に分析し、ヨーロッパにおいて中国をめぐる知が学術化していく過程でのその影響と意義を検討する。その上で、同時期の日本漢学や朝鮮儒学との比較対照を行い、中国思想の国際化における意義を検討する。このような史料調査、分析と並行して、関連各分野にまたがる研究交流ネットワークを構築し、研究情報の共有と、方法の妥当性の検証、必要に応じて方向修正をはかる。

4. 研究成果

上記「研究の目的」に挙げた3点に沿って述べる。

(1) 18世紀当時のヨーロッパにおける『メモワール』の受容と作用について

この問題については、第1に『メモワール』刊行当時のヨーロッパにおいて、中国をめぐる関心が具体的にどのような問題に対するものだったのか、およびこうした関心を受けて『メモワール』がどのような方向性を有していたのかを検討課題とした。その際、まず「研究開始当初の背景」に述べたごとく、『メモワール』に掲載されたものを多く含む在華イエズス会士アミオの報告について、調査と分析を行い、その成果をまとめた博士論文をもとに、大幅な加筆修正をほどこしたうえで単著としてまとめた。

『メモワール』に収録されたアミオの報告に関しては、上記のほか、博士論文および単著の段階では典拠の一部が不明のため、十分取り組むことのできなかった『武経七書』のフランス語訳についても、進展があった。フランス国立図書館において、アミオが参考文献とし、フランスへ送った可能性のある満洲語訳の版本の一部を発見することができた。これらの版本はきわめて分量が多いため、2020年度から開始する基盤研究(C)「中国をめぐる知の形成と環流——在華宣教師とオランダ中国学を中心に」において、引き続き調査と分析を進めるつもりである。

第2の課題として、第1巻(1776)巻頭論文「中国古代についてのエッセー」(以下「エッセー」)第一部の分析に取り組んだ。「エッセー」は、中国人イエズス会士の高仁(フランス名は Aloys Ko)が、フランス出身在華イエズス会士と協力して執筆したフランス語論文である。高仁は、同じく現地のイエズス会士である楊執徳(フランス名は Etienne Yang)とともに、宣教師やベルタンの手配によってフランス留学を果たし、帰国後は北京北堂でフランス出身在華イエズス会士たちと同居した。高仁の帰還を端緒として、フランス政府と北京在住在華イエズス会士との文通が始まり、この文通によって送られた報告が編纂を経て『メモワール』として刊行された。そのため高仁と楊執徳の存在は『メモワール』の誕生に決定的な役割を果たしたといえる。

「エッセー」は、中国におけるもっとも古い時代の歴史、あるいは歴史の始まりを主題としており、当時のヨーロッパにおいて文明の起源に対する探求と連動して高まっていた中国古代史への関心を意識し、上古史をめぐる現地での議論および史料の蓄積について述べている。とくにきわだつのは、天文観測記録をともなう「真正な」文献として儒教の経書、とりわけ『書経』の重要性を強調している点であり、その際に高仁は新旧論争の古代派に言及させている。もともと『書経』は、中国の歴史の古さを証明するための信頼すべき史料として、たびたび在華イエズス会士によって引用されてきたが、そのことがかえってヨーロッパ知識人による『書経』の真正性に対する検証への動機づけともなった。その結果、『書経』の現行版本の錯綜した由来や天文観測記録の曖昧さなどが、エジプト人中国植民説をとるド・ギーニュのようなヨーロッパの学者に、自説の補強として利用されることになった。ド・ギーニュは自説を高仁や楊執徳に開陳しており、「エッセー」も直接的にはド・ギーニュの主張に対する反応として書かれている。この点から「エッセー」が文明の起源をめぐる議論に密接に関与していたことが分かる。

第3に、フランス語で出版された『メモワール』の他言語への翻訳、およびヨーロッパ内外での流通について調査した。まず『メモワール』のロシア語やドイツ語への翻訳を発見することができた。ロシア語に関しては、『メモワール』第1~2巻、および『メモワール』第12巻所収の『孔子伝(La vie de Koung-tsee)』の翻訳を、それぞれ北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、および徐家滙蔵書楼(上海)で閲覧することができた。また『メモワール』のドイツ語訳版に関しては、やはり徐家滙蔵書楼のレーヴェンダール文庫(Björn Löwendahl Collection)のカatalogにて、所在を確認することができた。

次に松井洋子氏の「ティツィングの伝えようとした『日本』」(横山伊徳編『オランダ商館長の見た日本: ティツィング往復書翰集』吉川弘文館、2005年)によって、オランダ商館長として日本に滞在したティツィング(Isaac Titsingh)の手稿のなかに、中国と日本の年表を対照させたものがあることを知った。そこで武蔵大学図書館所蔵のマイクロフィルムを調査した結果、大英図書館所蔵のティツィング手稿において、アミオの翻訳した『歴代三元甲子編年』と同定できる年表の翻訳が大規模に引用されていることが分かった。なお『歴代三元甲子編年』は清朝欽定書に

付された、黄帝の治世を起点とする年表であり、アミオがこれを底本として著した中国年代記すなわち『中国帝国普遍史概説』が『メモワール』第13巻に収録されたことについては、2017年の単著の第9章で論じた通りである。つまり『メモワール』の内容が、ティツィングによる日本研究に利用されたということであり、『メモワール』の同時代における流通範囲の広さを示している。

さらにヨーロッパの外における『メモワール』の流通に関しても、日本の植民地統治下の満洲でその一端が見られたことが、満鉄奉天図書館発行の『収書月報』の調査を通して明らかとなった。『収書月報』1936年2月号では、『メモワール』がパリから到着した旨の広告が出されており、こうした広告が出ることで自体が異例であることから、館長の衛藤利夫がこの報告集の獲得を待望していたことがうかがえる。

(2) 19世紀ヨーロッパにおけるシノロジーの成立と展開への作用

以上の『メモワール』のドイツ語やロシア語への翻訳、およびティツィングによる引用の事例から、同時代ヨーロッパにおいて『メモワール』が空間的、言語的、時間的枠組みを越えて広まったことのみならず、カトリック圏外においても在華イエズス会士の報告が中国にまつわる情報の源泉として摂取、利用され、オランダなど各地におけるシノロジーの形成に作用した可能性が浮かび上がってきた。このような可能性にもとづいて、発展的課題として、前掲の基盤研究(C)を構想するにいたったことも、本研究における成果の1つである。

そのほか、1814年にコレージュ・ド・フランスに創設された「シナおよびタタール満洲の言語と文芸講座 (Cours de langue et littérature chinoise)」の初代教授、レミュザ (Abel Rémusat) を中心に、19世紀フランスにおけるシノロジーの成立に深く関わった人々による著述の分析も行った。その結果、フランスにおけるシノロジーの成立が、18世紀以前の在華イエズス会士による知的蓄積の参照、および逆説的ながら宣教や貿易においてフランスと清とのあいだの移動の中断を直接的な契機とすることが分かった。

さらに、前掲の徐家滙蔵書楼における調査を通して、前述のアミオによる『武経七書』のフランス語訳に付された雍正帝の賭博禁止の訓諭が、18世紀末のフランス知識人によって引用されていることも判明した。そこで19世紀における引用例も調査したところ、フランス社会における道德教育の分野において、この訓諭がたびたび引用されており、在華イエズス会士によって発信された知の一部がシノロジーの外で継承、および現地化されたことが明らかとなった。

(3) 同時代の日本漢学や朝鮮儒学との対称性あるいは非対称性について

この問題については、研究期間中に具体的な成果を出すにはいたらなかった。ただし2019年度にチューリッヒ大学のトレムル・ヴェルナー氏 (Birgit Tremml Werner) を講師として招聘し、東京大学東洋文化研究所との共催でセミナーを開催し、また第11回国際アジア研究会議 (International Convention of Asia Scholars 11) で私が責任者となってトレムル・ヴェルナー氏のほか阿久根晋、王雯璐、木崎孝嘉の各氏とのパネルを企画したことがきっかけとなり、中国や日本、琉球、ベトナムなど近世東アジア各地においてヨーロッパの宣教師や貿易商、および現地の人々が多様に関わりながら形成された情報網を主題とする論文集の企画を進めている。このような関連分野の研究者たちとの交流を通して、(3)の問題について引き続き検討していくつもりである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 新居洋子	4. 巻 52(15)
2. 論文標題 歴史の真正性をめぐる論争のなかの『書経』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 212-219
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoko Nii	4. 巻 17
2. 論文標題 Book Review: Dispelling the Darkness: A Jesuit's Quest for the Soul of Tibet By Donald S. Lopez Jr. and Thupten Jinpa. Cambridge, MA: Harvard University Press, 2017. Pp. 302.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Asian Studies	6. 最初と最後の頁 86-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S1479591420000078	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 新居洋子	4. 巻 2
2. 論文標題 他者の発見と自己の再発見 明清時代の中国とヨーロッパとの思想接触	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大東史学	6. 最初と最後の頁 15-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新居洋子・王ブンロ（Wang Wenlu）	4. 巻 -
2. 論文標題 中国キリスト教文献データベース Chinese Christian Texts Database について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京大学附属図書館U-PARLウェブサイト	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 新居洋子	4. 巻 73 (7)
2. 論文標題 書評 田中有紀著 東京大学出版会『中国の音楽思想：朱載堉と十二平均律』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国研究月報	6. 最初と最後の頁 35-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新居洋子	4. 巻 90
2. 論文標題 礼をめぐる文化間対話	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アステイオン	6. 最初と最後の頁 175-179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新居洋子	4. 巻 第88号
2. 論文標題 あらためてアミオの普遍を考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日仏文化	6. 最初と最後の頁 155-157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新居洋子	4. 巻 第824号
2. 論文標題 書評 藤原敬士著『商人たちの広州：一七五〇年代の英清貿易』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 90-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新居洋子	4. 巻 第72巻第8号
2. 論文標題 書評 宋莉華著 鈴木陽一監訳 青木萌訳 東方書店『宣教師漢文小説の研究』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国研究月報	6. 最初と最後の頁 26-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新居洋子	4. 巻 第836号
2. 論文標題 「中国の音楽」と科学	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 青淵	6. 最初と最後の頁 30-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新居洋子	4. 巻 第155号
2. 論文標題 在華イエズス会士と日本の近代	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Nouvelles	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新居洋子	4. 巻 第77巻第1号
2. 論文標題 「中国古代についてのエッセー」(一七七六)読解 第一部を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東洋史研究	6. 最初と最後の頁 130-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新居洋子	4. 巻 706
2. 論文標題 読書案内 在華イエズス会士と明清宮廷	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 歴史と地理	6. 最初と最後の頁 38-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Nii Yoko
2. 発表標題 Chinese History Books in European Historiography
3. 学会等名 Books as Texts and as Objects: The Production, Circulation, and Collection of Knowledge in Asia and Europe (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 新居洋子
2. 発表標題 他者の発見と自己の再発見 明清時代の中国とヨーロッパとの思想接触
3. 学会等名 2019年度大東文化大学・歴史文化学会秋季大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nii Yoko
2. 発表標題 Varo's Shengjiao mingzheng: Its Appearance and Reappearance in East Asia from the Seventeenth to the Nineteenth Century
3. 学会等名 International Convention of Asia Scholars (ICAS) 11 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 新居洋子
2. 発表標題 法国国家図書館蔵『康熙皇帝遺詔』法訳初探
3. 学会等名 西学与明清之際的文化变遷系列工作坊（一）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 新居洋子
2. 発表標題 明清時期西学書在明治日本の流伝
3. 学会等名 ”中国与日本之間的西学” 国際学術会議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 新居洋子
2. 発表標題 在華イエズス会士にみる東西思想交流
3. 学会等名 京都フォーラム・共働実学研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 山内志朗、渡辺優、アダム・タカハシ、新居洋子、大西克智、池田真治、小倉紀蔵、中島隆博、藍弘岳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 336 (127-150)
3. 書名 世界哲学史 5 (第5章「イエズス会とキリシタン」新居洋子)	

1. 著者名 齋藤晃(編)、ギジェルモ・ウィルデ、折井善果、新居洋子、中砂明德、真下裕之、岡田裕成、小谷訓子、岡美穂子、網野徹哉、鈴木広光、王寺賢太	4. 発行年 2020年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 554 (162-199)
3. 書名 宣教と適応ーグローバル・ミッションの近世ー (第4章「学知と宣教」新居洋子)	

1. 著者名 岡本隆司、箱田恵子、鈴木開、彭浩、村上信明、柳静我、柳澤明、小沼孝博、豊岡康史、新居洋子、中砂明德、村上衛、青山治世、蒲豊彦、森田吉彦、渡辺美季、野田仁、望月直人、森万佑子、古結諒子 他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 264 (40-45, 48-49)
3. 書名 ハンドブック近代中国外交史：明清交替から満洲事变まで(担当：第11章「一六～一八世紀のカトリック宣教師」および第13章「マカートニー使節団とアマースト使節団」)	

1. 著者名 新居洋子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 414
3. 書名 イエズス会士と普遍の帝国 在華宣教師による文明の翻訳	

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap https://researchmap.jp/kak10757280en/
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 The 60th GJS Seminar Naojiro: a global historian avant la letter?	開催年 2019年～2019年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------